



Title	「モンゴル秘史」の一芸術的表現の意味
Author(s)	Gaadamba, M. ; 橋本, 勝
Citation	大阪外国語大学学報. 1976, 37, p. 11-17
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80591">https://hdl.handle.net/11094/80591</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 「モンゴル秘史」の一芸術的表現の意味

M. ガ ー ダ ン バ

橋 本 勝 訳補

## M. Гаадамба. „МОНГОЛЫН НУУЦ ТОВЧООНЫ“ НЭГ УРАН ХЭЛЛЭГИЙН УЧИР

ХАШИМОТО Масару орчуулав.

Mr.M.Gaadamba is well-known as a Mongol philologist in the Mongolian People's Republic. He contributed an interesting article, Монголын Нууц Товчооны нэг уран хэллэгийн учир to *Studia Mongolica*, Tomus IV, Institute Linguae et Litterarum Academiae Scientiarum Reipublicae Populi Mongoli, Ulan-Bator, 1964. In the article the author referred particularly to some interesting phrases with the word *noqai* “dog” in the *Secret History of the Mongols*, remarking on the image the Mongols had probably had of the dogs since the ancient times. Some additional notes and corrections were prepared by the translator.

「モンゴル秘史」の第195節に “Temujin anda minu dorben noqais-i gu'un-u miqa-ar tejiyeju gingjileju huyaju aqu bule'e,, (我がテムジン・アングは、四匹の犬を人肉で養い鎖でつなぎ縛って居るのであった) と言っている。

その四匹の犬は、誰かと言えば “Jebe, Qubilai 二人と Jelme, Sube'etai 二人,, と上の言葉を語ったジャムカが付け加え説明したのである。

一体、如何なる意味でチンギス・カーンの大切な勇士(バトル)達や側近の僚臣(nökör)を「秘史」でこのように「犬」(複数)と呼んだのか? これは、芸術的表現なのか? 或は術語なのか? 等の問題が生じている。

この言葉は、「モンゴル秘史」を編んだ歴史家自身が語ったのではない。寧ろチンギス・カーンの若い頃の親愛なる盟友であったが、後に和解し難い張り合う敵となったジャムカ・セチェンが言ったものなので彼の勇士達を態と当付けに嘲弄したか或は皮肉を言った内容の言葉と言ってよかろう。特にそれらの勇士達の顔付をジャムカが更に説明するのには、 Tede dorben noqais, siremun manglaitan si'uci qosi'utan sibuge keleten temur oruten uldu (ildu) mina'atan si'uderi ideju kei unuju yabud tede. alalduqui udur haran-u miqa ided tede. gurelceku udur gu'un-u miqa gunesuled tede. ginji-ben multuldeju edo'e ese-u buqsaju aqsad bayascu teyin silemeljen ayisai. (それらの四匹の犬は、銅の額を持ち、鑿の口髯を持ち、錐の舌を持ち、鉄の心を持ち、刀の鞭を持つ。露を食べて風に乘って行く、彼等は。殺し合う日、人肉を食べる、彼等は。至り合う日、人肉を糧食とする、彼等は。自らの鎖を解かれて今繋がれずに居るのを喜んでかように涎を垂らして近付いて来る。)等と言った事を見ると実際に彼等の残忍な略奪を皮肉っていると言ってよい面がある。

その外に、この言葉をジャムカは、ナイマン部の臆病な王、タヤン・カンと共に山上から山の傾斜面で起っている戦いを見ている時に話したものでナイマンのその肝玉のないカンに更に恐れさせ威嚇しようと故意に言った可能性も亦ある。何故かと言えば、その戦闘の過程を見てタヤン・カンが恐れて山頂へと後退しチンギス・カーンと闘う事が出来ない顔付であったのでジャムカは、自分の僚臣を連れてタヤン・カンから別れて後退、逃亡する時、チンギス・カーンへ伝言させた事の中で（第196節）：

Uge-dur minu ukutguju o'ede temecen urguju qarba. ama-ar alaqdaju ayuju abarin qarba. 《我が言葉に昏んで上方へ争い驚いて登った。口にて殺されて恐れてよじ登った。》と記しているのを見るとジャムカがタヤン・カンに言葉で死なせて口にて殺し恐れさせ威嚇して言った事は、明白である。そうするとその勇士達を威嚇し咬みたがる犬と比較して言った芸術的表現と見做す事が出来る。

併し、この嘲弄、諧謔の態度は、封建領主の関連の一つの現われとなった伝統的な術語・象徴に基づいて創られたと言う可能性も亦ある。一般に「犬」(noqai)と言うのは、封建領主から自分の忠誠な隷属領主 (вассал ноёд) や従順でおとなしい隷臣 (албат) を呼ぶ一術語であったように思われる。これは、「秘史」の他の一節、特に言及すれば第209節より明らかになる。此处でチンギス・カーンが自ら正にその四人の勇士を「犬」(noqai) と直接に呼んだ結果生じる事：

“Ede Qubilai, Jelme, Jebe, Subegetai ta dorben noqas-ıyan sedkigsen-tur jori'ulju ile'esu...”<sup>(i)</sup> 《これらクビライ、ジェルメ、ジェベ、スベゲタイお前たち自らの四匹の犬を思った所に遣るならば…》戦争になると気持ちが安まると思出して語っている。此处で冗談を言ったり巫山戯る間投詞は、無いし可成り厳粛・公明な態度でチンギス・カーンがこの言葉を語った。同様に「秘史」の第260節にウォルンゲチ市 (Örünggeci balaqasu) を占領してカーンなる父に分捕品の分前 (хувь) を未だ賦与しない三人の息子にチンギス・カーンが大いに怒っているとホンハイ (Qongqai), ホンタハル (Qongtaqar), チョルマハン (Cormaqaan) の三人のホルチ (Qorci) が自らの領主を鎮め諫めるには “man-i töbödüd noqod-ıyan tukircu ile'esu”<sup>(ii)</sup> 《我々、チベット

の犬どもを放って喉けて遣るならば》我々は、敵を圧えて分捕品を持って来て差し上げたいと言う意味の言葉を語っている。その中で彼等は、自らを「犬」と呼んだばかりでなく大いに誇りや歓喜に満ちた乃至は信頼出来て誠実な僚臣なる我々を派遣するならば貴下に貴方の子息達より低からざる分捕品を持って来て差し上げたいと言う気持ちでこの言葉を語った。これから見ると「犬」(noqai) という言葉を「誠実で信頼出来るもの」の象徴として術語的性格を以て用いていたに違いない。

「犬」(noqai) という語がモンゴル封建領主の象徴の言葉に一体このような意味で用いられていたもう一つの証拠を我々は、“Суут богд Чингис-хааны гэгээнээ өргөх өчиг”<sup>(1)</sup> という聖典 (онгоны судар) より見付け出した。そこで語っている事は：

“Dayan Mongyol cinu olan bile. Tere mayu albatu noqai cinu. Olan Mongyol cinu olon bile.

“Ömcitü maγu albatu noqai cinu”<sup>(1)</sup> (全モンゴル人(←汝の)は、多かった。その悪い隸臣は、汝の犬也。多くのモンゴル人(←汝の)は、夥しかった。財産のある悪い隸臣は、汝の犬也。)

その故に隸臣をも「犬」と呼ぶ習慣、因襲があるのだった。これから見ると「犬」と言うのは、封建領主の術語的性格があったようだ。

この術語には一体如何なる意味や象徴が込められていたのか？ 我々の考えでは、この noqai (犬) と言う言葉は、隸民 (албат хамжлага), 奴隸 (вассал) が自らの主君＝領主 (эзэн ноён) に対し「忠実・従順である」と言う意味で用いられていたと思われる。チンギス・カーンの堅く守っていた主君＝領主に忠実であるべきこの規範は、モンゴル封建領主の犯す可からざる思想であった。

モンゴル封建領主達に対して「犬」が何うして従順・忠実の象徴となったのか？ この疑問にはモンゴル人歴史家ラシプンスク (Rasipungsuγ) の “Bolor erike” と言う年代記に書かれている詩が答えとなりそうに思われる。原典に語っている事は：

“Menggede secen öcirün : Noqai metü nökör olquy-a berke. Noqai ügegüü kümün-dür tejiyegdebesü bayan kümün-i ülü dayamui. Qaracu kümün-dür asaraydabasu qayan kümün-i ülü tanimui.”<sup>(2)</sup> (メンゲデ・セチェンが奏するには：犬の如き友を得るのは、困難だ。犬は、貧しい人に養われるならば富める人に従わない。庶民に養われるならば王なる人を知らない。)

かくの如く主君＝領主に従順・忠実・忠誠なるものの象徴となった犬の形象がモンゴルの年代記に久しく広く用いられていた。例えばモンゴルの著名な歴史家サガン・セチェン (Sayang secen) の “Erdeni-yin Tobci” (「蒙古源流」) に語っている中では：“Tende basa nigen sönide qayan (= Toγon temür) eyin jegüdülerün nigen cal buruγul ebügen kümün irejü : “Ci öber-ün qotaci noqai-ban tebcilügei. edüge γadayadu dobtuluyci cinu-a iren amui, tegüne arγ-a yaγun sedkimüi ci kemen yekede kilinglejü dongyutdun ügüleged qorumqan-a ügei boluγsan-i jegüdülejü amui.”<sup>(3)</sup> (そこで又或る晩に王(即ちトゴン・テムル)がこのように夢に見て曰く、一人の白髪の老人が来て、「お前は、自分の番犬を捨てた。今、外に襲わんとする狼が来て居る。そこで方法は、何と考えるか、お前は」と大変怒って叱責し語って忽に消えたのを夢に見ている) と言っている。

漢人官吏ジュゲ・ノヨン (Жүгэ ноён) の方から大君主国で危険が生ずるかも知れない事を大カーンに一度ならず思い出させて大カーンのトゴン・テムルに不当な讒訴の権力によって処罰された忠実な領主トクタフ・タイシ (Тогтаху тайш) を自らの番犬と比較して占って見せたり又そのジュゲ・ノヨンを、町を襲う狼と同一視した事は、君主国の外敵の象徴とするものであった。このように忠実・忠誠な官吏を犬と、反逆・敵対する外敵を狼と比較した事が遊牧民種族の真実の生活、事実より現われた実に独特な文学風理念である事は、明らかである。遊牧民にとって彼等の家畜群、小屋、囲いを密かに侵害する草原の狼や危険から誠実に保護する最も忠実で用心深い友となった番犬の形象が抒情美の如何なる評価、結論を持つかは、自ずと明白だ。全てこの

形象は、「モンゴル秘史」や後世の年代記よりずっと古い時代に口碑文学や遊牧民の言葉に基盤が敷かれた文学形象の基礎の上に封建領主の術語・象徴となって用いられたのだろう。更に犬は、唯モンゴル人ばかりでなく一般に中央アジアの遊牧種族、例えば若干のチュルク民族にも亦「誠実で信頼出来るもの」乃至「奴隷のように温順なもの」の象徴と見做す習慣があった事は、上述の考えを重ねて裏付けている。アラブ人のイスパニア文献学者アト・トゥルトウシ(Ат Туртуши)(1126年死没)は、「諸王の炬火」(“Светоч царей 即ち сирадж ал мулук”) と言う著名な書物で(第61節)偉大な将軍に有るべきだとチュルクの指導者達が見る猛獣の10の特徴の中「犬の温順」「狼の貪欲」の二つを入れ数え上げている。<sup>(4)</sup>これは、中央アジアの遊牧諸種族の中に於てずっと古くから犬が温順・温和或は忠誠な奴隷の象徴であり狼は、貪婪・貪欲の形象であった事を示している。

更に学生ウォムオルザフの報告によればカザフ人の中に下記の二つの諺があるが、それも亦犬の形象が遊牧民衆の中に「誠実で信頼出来るもの」の象徴となっている事を示している。

Төреге сенгенше	(領主を信ずるより)
<sup>(5)</sup> Төбет итке сен	(自分の犬を信じよ)
Төрени жемдегенше	(領主を養うより)
Төбетти жемде	(自分の犬を養えよ)

犬は、領主より更に信頼出来て且つそれ(犬)を養う方が領主を養うより増しだと言う評価を遊牧のカザフの民衆は下した。

これは、全て「モンゴル秘史」より以前にもモンゴル・チュルク遊牧諸種族の民衆の言葉、口碑文学に於て犬の形象に「誠実で信頼出来るもの」の象徴を染み込ませて用いる抒情美の伝統があったのだろうと言う我々の結論を更に確実にしている。併し、更に犬と言う言葉とモンゴルの古典文学のもう一つの芸術的形象や抒情美の理解とが関わっていた。この具体的な一証拠を我々は、同様に「モンゴル秘史」より見出した。第188節に書かれているには、Kokocu ugulerun : “Sangum-i erelesu keyen buyu-je ci ke’aju’ui. Tere uge-tur eme inu ugulerun : Eme gu’un noqai ni’urtai ke’egdeyi-je bi” 《ココチュ曰く「セングンを夫にしようとしているのだろう、お前は、」と言った。その言葉に対して彼の妻が曰く「女人は、犬の面をしていると言われるでしょう、私が。」と言った。此処でココチュ馬丁は、自らの妻がそのセングン・ノヨンと共に居るのを非難すると妻が「女人は、犬の面をしていると言われるでしょう、私が。」と答えたのを見れば「私は、犬のように恥も外聞も知らない淫乱だと言われる」と言う意味で答えたのだ。モンゴル人の“Гичий”<sup>(v)</sup>と言うタブーの不浄な悪罵があるが、それは、正に牝犬の呼称であり又「淫売婦」と言う意味がある。淫乱な行動をする放蕩な女を牝犬と比較して記す事は、モンゴルの古典文学作品に少なからず出くわすものである。

古典文学の伝統によってチンギス・カーンが語った言葉の如く付言する格言の中に我々は、下記の興味深い言葉を見付け出す事が出来る。

Qoyar sedkil-tü ere bolbasu ere busu eme kemegdekü. Nigen sedkiltü ere bolbasu  
ere busu erdeni kemegdekü. Kerbe jiren (jirin) sedkil-tü eme bolbasu eme busu noqai  
kemegdekü. Nigen sedkil-tü eme bolbasu eme busu ere kemegdekü. Teyimü-lüge ker<sup>(vii)</sup>  
nököceldükü kereg kemen jarliy bolba.<sup>(6)</sup>

《二心ある男とならば男ではなく女と言われよう。一心の男とならば男でなく宝と言われよう。  
もし二心ある女とならば女でなく犬と言われよう。一心の女とならば女でなく男と言われよう。  
そのような事と何うして共に関わる必要があるかと聖旨を下した。》

此処で主君に誠実で信頼があり且つ裏切って寝返りを打つ事のない男や同様に夫に変わる事なく  
誠実な女を共に重んじ評価しているが、領主＝主君に誠実でない男や又夫に誠実・忠実でないふ  
しだらな女を共に道徳上不浄なものと非難した。この言葉で二心があったり或は誠実でない女を  
「犬」と比較したのは、正にその秘史の言葉が月並みの一語ではなく諺的な性質のものであり、淫  
乱を注意する言葉であると言う学者 A. モスタールトの説を重ねて確証している。「秘史」の「女  
は、犬の面をしていると言われましよう、私が。」と言ったのを漢語総訳ではその諺的な性質を加  
味して翻訳された事を A. モスタールト氏が指摘したのだった。<sup>(7)</sup>

その故に、貞操のない女を犬或は牝犬と比較する事は、秘史よりも以前に既に慣習となってい  
て且つ諺の性格を持っていたに違いなからう。これを更に今し方引用した教訓の類の中で若干の  
語、例えば“qoyar”, “jirin” と言う語を性 (Gender) を区別して用いた事は、この諺が古い起源  
を持つ事を証している。qoyar と言う語を専ら男性語に、jirin と言うのを女性語にのみ夫々この  
ように区別して用いるのは、「モンゴル秘史」及び中世モンゴル語に於て此処彼処に見られる現象  
であった。<sup>(8)</sup> 又、これは、古代モンゴル語に性 (Gender) の区別があった事の名残りである。モン  
ゴル古典文語更に現代モンゴル語ではそのように区別して用いなくなっている。

可成り後の年代記例えばサガン・セチェンの“*Erdeni-yin Tobci*” に犬の形象で実際に恥知ら  
ずにも男女の礼儀作法に悖る事をする者を当擦って言うのが見られる。例えばエルベクと言う情  
に厚い王が自分の弟ハグルチャク皇子の妃ホングワ・ページと言う人に恋情を抱くようになった  
事情をホーハイ・タイジと言う側近を通じて話させた所、ホングワ・ページは、大変驚き恐れて  
答え言うには：

“Tenggeri yajar qoyar qamtudqui yosun bileü? Degedü qad beri-yügen üjeküi törü  
bile ü? Qayurcay qung taiji degüü-yügen ükügsen-i sonosba u?

Qa an aqa anu qara noqai bolba u?<sup>(9)</sup>

《天と地二つが一緒になる習しがあっか？

最高の諸王が自分の花嫁を求める制度があったか？

ハグルチャク皇子なる自分の弟が死んだ事を耳にしたのか？

王なる兄は、黒い犬になったのか？)》

これから見ると色情を渴望する移気な性格の男も亦同様に「犬」の形象で代表させその恥知ら

ずを暴露した。そのようにモンゴルの歴史家、文学者の伝統的な理解に依れば「犬」が淫蕩、淫乱、恥知らずであり家族として頼りにならない人々の生活状態を代表する当擦りの形象であったのは、確実である。

併し、モンゴル封建領主の象徴の言葉に誠実で礼儀正しく信頼出来るものの形象を代表して現われる「犬」が何うして放蕩で家庭の面で規律なく移気なものの象徴となって文学作品に描写されたのかと言う疑問が自ずと生じている。此处で我々の考えに依れば下記のモンゴルの諺がこの疑問に対して或る程度答えとなり得ると思われる。

Temür-iyen ülü taniqu qaγurai.

Törügsen-iyen ülü taniqu noqai.<sup>(10)</sup>

《自らの鉄を知らない鍔

自らの生れを知らない犬》

この言葉は、血統の純粋性を守る事を重視する氏族社会時代に発生した可能性がある。当時、血族の人々同士が結婚する事を堅く禁止していたので皆他の氏族と結婚し息子は、父の妻（彼の母でさえなければ）を娶る事が出来たが、併し、自分自身の氏族から娶る事は、「自らの素姓を知らぬ犬」のように不浄な事だと嫌っていたらしい。

その故に犬の形象は、家庭の面で規律なきものの象徴となったのは、確かに非常に古い伝統的な考えであっただろう。「秘史」が後の諸年代記と同様に古代モンゴル人の遊牧生活事情から生れ出た多くの形象、象徴に基づいて自らの芸術及び術語の部門を創作した事は、全てこれより明らかである。

“Noqai”（犬）と言う語は、「モンゴル秘史」でこのように抒情美に関して非常に区別があったばかりでなくそれを全く逆の両立し難い二つの態度の象徴として用いた事は、実際に遊牧生活事情の上でこの動物をあらゆる面から見詰めて夫々別の面を芸術的意図から案出した確実な結果だと断言してよい。これは、更に非常に古い文学及び抒情美の理解の深い伝統に支えられていた事も明らかである。これは、「秘史」の芸術、言語構造、形状表現の多くの部門に見られる地方の遊牧民衆の実際の生活特有な反映の一つである。「秘史」の他の多くの形状表現、象徴術語も亦同様に草原の牧畜民の方から自らの生活、実際の状態を精密・的確に注視した成果であるし且つそれらにモンゴル人の実に特有な個々の生活状態の新しい足跡や昔の伝統の支えの離れえない関連が対になって見えるのである。これは、全て「モンゴル秘史」を極めて独特で独創的な本当のモンゴル民族の作品としたし又、実際にこの為に正にその「地方の美しく清い芳香」が「モンゴル秘史」から匂うのである。

モンゴル文学上最初の驚異的なこの文献を文学及び言語構造、民族学等の多くの方面から綿密に研究する事が依然として求められている。

注

1. モンゴル国立図書館写本。P.8. 図書館書籍の棚番号：B-525.

2. *Bolor erike*, Mongolian chronicle, part IV, vol. I, P. 100. HYL, Scripta Mongolica, Cambridge, Massachusetts, 1959. (iii)

3. Monumenta historica, tom.1, fasc.1, Sayang secen, *Erdeni-yin Tobci*, Ulaan-Bayatur, 1960. P.147 参照.<sup>(iv)</sup>
4. Е. Э. Бертельс, К вопросу о традиции в героическом эпосе тюркских народов. Советское Востоковедение IV, Москва-Ленинград. 1947. P.73.
5. 序でに言うところの“てбет”と言う語をアルマータ(Алма-Ата)で1961年に出版された「カザフ語詳解辞典」で「大きな犬」と説明している。(Казак тілінің түсіндірме сөздігі, vol. II, P.366) これは、「秘史」研究に関連する極めて興味深い事柄である。  
秘史の第260節に三人のホルチ(Qorci)がチンギス・カーンの怒りを鎮めて語る時, “Man-i töbödüd noqod-ıyan tukircu ile’esu” (我々、チベットの犬どもを放って喉けて遣るならば) 我々が敵を抑えて分捕品を持って来て差し上げますと言った。この語を С.А.Козин (P.188), E.Haenisch(P.131) 達は, “チベット犬”と翻訳したし Ц. Дамдинсүрэн (P.231) は, “咬む犬(を)” (зуудаг нохдыг) と夫々訳したのである。実際にはこれは, チベット犬ではなく, きっと「大人になった牡犬」と言う言葉であろう。
6. *Cinggis qaγan-u cadiγ*. Pekin, 1925. pp.152-153.
7. Mostaert, *Sur quelques passages de l'Histoire secrète des Mongols*, HYL Cambridge, Massachusetts, 1953. pp.107, 108, 357, 358.
8. Ц.Дамдинсүрэн, Монгол уран зохиолын тойм, Улаанбаатар. 1957. P.65.
9. Sayang secen, *Erdeni-yin Tobci*. УВ. 1961, P.159-160.
10. Ц.Дамдинсүрэн, Исторические корни Гэсэриады, Москва, 1957, P.64.

#### 訳者注

- i. 著者ガーデンバ氏は, ... ilejü (илэжү) と本文で記しているが, これは, 明かに... ile’esu の誤りである。同209節にはこれとほぼ同文が直後に現われそこでは... ileju と記されている。その為による誤りである。
- ii. töböd noqad (西番狗) について札奇斯欽 (S.Jagcid) 氏は, 次のように述べている。即ち「西藏狗壯大力強, 較蒙古狗尤爲兇猛。惟不善於獵捕禽獸, 故蒙古人多用以守家或看守羊群。現在純種西藏狗在蒙古地方仍受重視。」(姚從吾譯註, 札奇斯欽校補,「蒙古秘史」下「文史哲學報」第十一期, 台北. 1962年, P.384.)
- iii. *Bolor erike*, part VI, 1959, p.100 の記述は, ガーダンバ氏の引用記載と一致せず若干の語句に異同が見られる。即ち, Menggede secin bayasun ayiladγarun : Noqai metü nökör olquy-a berke. Noqai anu ügeigüü kümün-dür tejigegdebesü bayan kümün-i ülü daγamui. Qaracu kümün asaraγdabasu qaγan kümün-i ülü tanimui.
- iv. *Erdeni-yin Tobci*. Ulaan-Bayatur, 1961, P.147 の記述は, 此处に見られるものと大幅に異なる。
- v. 第188節の Eme gu’un noqai ni’urtai ke’egdeyi je bi をガーデンバ氏は, би эм хүн нохой нүүртэй гэгдэвээ зээ と解釈している(原文P.151)。併し, ke’egdeyi は, ke’e-gde-yi と形態分析出来るものであり -yi は, Praesens Imperfecti の一語尾であり前古典期モンゴル文語や中世モンゴル語でよく見られるが, 女性に言及する場合に用いられる。(尚, -yi については N.Poppe, *Introduction to Mongolian Comparative Studies*, Helsinki, 1955. pp.264,268 参照。)男性形式 (masculine form) は, -yu である。従って гэгдэвээ の如く -вээ (過去終止語尾 -в の variant と見做される) を付した形式で言いかえているのは, 「秘史」原文に忠実でない。
- vi. 元来は, 犬で現在は牝の狼や犬を呼ぶようになった。өлөгчин жингэр とも言う。(Я.Цэвэл, Монгол Хэлний Товч Тайлбар Толь. Улаанбаатар, 1966. P.145)
- vii. A.Mostaert 氏は, ker でなく ger と見做す。尚, 詳細は, Mostaert, *op. cit.*, pp.108-109 参照。
- viii. 前注 (v) と同様に同氏は, 此处でも... гэгдэв жэ би と訳出するが, 原文の忠実な訳から逸脱する。